

「ホーム」はどのようにつくられるのか

—ビジュアル・エスノグラフィー研究を事例に—

大橋 香奈

1. 研究の背景と目的

1.1 「ハウス (house)」と「ホーム (home)」

「先生はホームレスになったの？」

「ホームレスじゃなくて“ハウスレス”。別物よ。心配しないで」

—映画『ノマドランド』（ジャオ 2020）

住み慣れた自宅を失い、キャンピングカーで暮らす主人公ファーンは、買い物中に偶然再会したかつての教え子に、このように答えた。映画の原作『ノマド：漂流する高齢労働者たち』を書いたジャーナリストのジェシカ・ブルーダー (Jessica Bruder) は、3年間かけてアメリカ各地をめぐり、車上生活する数百人の高齢の「ノマド (放浪の民)」に取材した。彼女が取材した「ノマド」の多くは、2008年に発生した世界的な経済危機「リーマン・ショック」の影響で、財産や仕事を失った人びとである。ブルーダーは、アメリカに出現したこの新しい貧困層の人びとの生きざまに注目した。「彼らを“ホームレス”と呼ぶ人もいるが、現代のノマドはそう呼ばれるのを嫌う。避難所と移動手段との両方を持つ彼らは、“ホームレス”ではなく“ハウスレス”を自称している」(ブルーダー 2018: 11) という。

「ハウス (house)」と「ホーム (home)」の違いは何か。この問いに対して、250年の歴史をもつ百科事典で知られるブリタニカ (Encyclopædia Britannica, Inc.) の編集者は、自社のウェブサイトで次のように答えている。

「ハウス (house)」と「ホーム (home)」は、どちらも誰かが住んでいる場所を指す。ハウス (house) は、誰かが住んでいる建物を表す、より一般的な言葉である。ホーム (home) は、建物だけでなく、その中で暮らす人びとや、その人びとの日常的な営みも表す、より個人的な言葉である (Encyclopædia Britannica, Inc. 2022 から訳出)。

日本においても「ハウス (house)」と「ホーム (home)」という言葉は、カタカナ表記で広く一般的に使われており、国語辞典にも掲載されている。「ハウス」の意味は「1 家。

「ホーム」はどのようにつくられるのか

家屋。住宅。2 建物。小屋。(その他が続く)」とあり、ブリタニカの編集者による解説と同様に、物理的な空間を指す言葉であることが示されている (小学館 2022a)。一方の「ホーム」は「1 家庭。家。2 故郷。本国。また、本拠地。(その他が続く)」とあり、「ハウス」より意味の広がりがあることがわかる (小学館 2022b)。

文化地理学の視点から「ホーム」をめぐる研究についてレビューした福田珠己は、次のように述べている (福田 2008 : 404)。

ホームとは日常生活の様々な場面で使用される一方、曖昧で複雑な用語である。それは、具体的であると同時に抽象的なものであり、また、人が実際に生活する場所であると同時に、心地よいと感じるような心理的状况や関係性である。また、自らの本拠地と感じるようなスケールも、ごく個人的な関係から、住まいや郷土、国家へと広がっていくものでもある。

福田はこのように述べ、多義的な言葉である「ホーム」を「ただ一つの日本語に翻訳し、一つの意味に封じ込めるのは得策ではない」(福田 2008 : 404) としてカタカナ表記を採用している。

1.2 ホームと感じられる場所

ファーンは、物理的な建物としての「ハウス」を失った。しかし、キャンピングカーという暮らしの拠点を持ち、各地を旅しながら季節労働者として働き、多様なノマド達と出会い、自分の進む道を模索していた。彼女は、その暮らし方に対して信念を持ち、「ハウス」はないが「ホーム」はあると感じることができていた。だから、教え子に対して、自分は“ホームレス”ではないと主張したのではないか。

私はファーンのようにキャンピングカーで暮らしたことはないが、これまでに 20 回の引っ越しを経験した。自分にとって唯一絶対的と言える「ハウス」はなくても、「ホーム」と感じられる場所はあるという感覚を知っている。私の場合、引っ越しの多くは自分の選択ではなく、家族のやむを得ない事情によるものだった。数年前まで、人生の大半を借家で暮らしてきた。日本における引っ越し回数の平均は 3.04 回 (国立社会保障・人口問題研究所 2016)、持ち家住宅率は 61.2% である (総務省統計局 2019)。大半の世帯が、持ち家で暮らしている。定住傾向の強い日本において、私のように特定の「ハウス」に留まらず転々と暮らす経験をしてきた人は、多数派ではない。私は、唯一の「ハウス」を持たない状態を長く経験し、自分と周囲の人びとの経験を比較する中で、「ホーム」をめぐる感覚に注目するようになった。

「ホーム」と感じられる場所は、どのようにつくられるのか。ここでいう場所は、単に物理的な空間という意味ではない。人類学者のセタ・ロー (S. Low) は、空間と場所の概念的関係についての様々な分野の議論を、ベン図を使っておおまかに整理している (Low

2017: 13-14)。その中で、一般的に日常的な会話や文章においては、「空間」と「場所」の厳密な概念的区別は行なわれておらず、同じ領域を表す重複する概念として扱われていると説明する (図1)。



図1 空間と場所の一致 (Low 2017: 14 をもとに訳して作成)

これに対し、社会学者が「空間」と「場所」について考える際は、空間を包括的な概念とし、内部にその下位分類または特殊な種類としての場所が含まれると位置づけるのが一般的であると説明している (図2)。

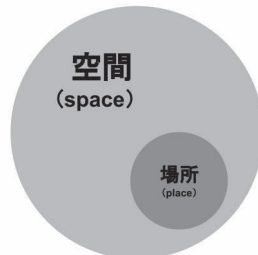


図2 空間に含まれる場所 (Low 2017: 14 をもとに訳して作成)

Low (2017: 32) は自身の考えとして、空間とは、「社会的生産と物質主義的な起源を保持する、より一般的で抽象的な構成要素」で「人間の身体や集団、そして歴史的・政治的な力によって生み出される、極めて社会的なものである」という。また、その空間を場所に変えるのは、「主観、間主観、アイデンティティの空間的位置づけ」であり、場所は「人間的・非人間的 (人間以外の) 重要性をあわせ持つ生きられた空間である」と述べている。本稿で注目するのは、Low の説明している意味での「場所」としてのホームである。ただし、場所としてのホームには様々なスケール／タイプがある。既出の引用の中でも福田が述べていたが、ホームは「自らの身体を中心とした感情的なつながりから、家庭、郷土、国家など多様な空間スケールで位置づけられるものである」(福田 2008: 404)。本稿では、空間スケールの比較的小さい、生活の場所としてのホームに注目したい。

「ホーム」はどのようにつくられるのか

生活の場所としてのホームについて十分に研究がなされていないことは、2000年代時点で福田が指摘していた(福田2008)。その後、国際論文誌 *Home Cultures* に代表されるように、学際的なアプローチでの研究が蓄積されてきた。最近では、デザイン人類学の研究者であるサラ・ピンク (Sarah Pink) らが、デザインとエスノグラフィーの両面から生活の場所としてのホームに取り組んだ複数の研究プロジェクトをもとに、書籍『*Making Homes: Ethnography and Design*』をまとめている。本書では、ホームは「私たちが人生の重要な瞬間を経験し、私たちの社会的世界のサイクルとリズムを刻む儀式を行なう場所である。また、重要なのは、ホームは、私たちの生活の親密で平凡な側面が生きられる場所でもある」と説明している。そして「プライベートなことだから」「言及する価値がないと思うから」あるいは「語るには辛すぎると感じるから」といった理由で、「人びとが他者に語らない活動の現場」でもあるが、「社会学者やデザイナーが直面する重要な社会問題」に寄与する発見が得られる現場だと示唆している (Pink et al. 2017: 1)。

本研究ではPinkらの指摘をふまえて、生活の場所としてのホームが、どのようにつくられているのかを考える。次の2章で、『*Making Homes: Ethnography and Design*』で提示されているホームを理解するためのアプローチとして、ビジュアル・エスノグラフィーの方法と、「時間性」という概念的枠組みを紹介する。3章では私が過去にビジュアル・エスノグラフィーの方法を用いて実施した博士研究における調査の事例を、Pinkらによる「時間性」の概念的枠組みを使って、あらためて考察する。4章では全体を総括する。

2. 生活の場所としてのホームを理解する

2.1 ビジュアル・エスノグラフィー

生活の場所としてのホームを理解するための調査研究において、Pinkらはビジュアル・エスノグラフィーの方法を取り入れている。Pinkはビジュアル・エスノグラフィーの分野で国際的な研究業績があり(たとえばPink 2013)、その知識や経験がプロジェクトに反映されている。ここでいうビジュアル・エスノグラフィーの方法論については、すでに別稿にまとめたが(大橋2019)、本稿に関連する部分を再掲する。

エスノグラフィーをはじめとする質的研究における、ビジュアルデータの使われ方の歴史の変遷については、バンクスのまとめによると、大きく分けて以下の二つの立場がある(バンクス2016)。一つは「実証主義」である。これは「客観主義」と言い換えることもできる。ビジュアルデータは「外の世界」に独立して存在すると考えて、調査者や調査対象者の認識を排除して、客観的なデータとして分析する(ことが可能)という立場だ。もう一つは「解釈主義」である。調査者も調査に参加する人もともに、より広い文脈や意味に照らしてビジュアルデータを解釈すると考える立場だ。Pinkが提案するビジュアル・エスノグラフィー

は、「解釈主義」の系譜に位置づけることができる。それは、ビジュアルデータを用いて現実についての「客観的」で「科学的」な説明をすることは目指さない。調査者と調査に参加する人の協働的な関係によって、ビジュアルデータを用いて現実について解釈し、知を創造することを目指すアプローチである。

『Making Homes: Ethnography and Design』では、この方法論と通底するエスノグラフィの方法が、生活の場所としてのホームを理解するための調査研究の実践例とともに複数紹介されている。ここでは、その中から本稿に関係する方法を三つ取り上げる。

・モバイルメディアを利用したインタビュー

会議室のような空間で行なわれるフォーマルなインタビューとは異なり、調査対象となる協力者の自宅でインタビューする場合、そこは協力者にとってプライベートな場所であり、その人の生活／生活史に関わるあらゆる「モノ」がある。Pinkらは、調査協力者にとっての「感覚的な環境」である「ホーム」に身を置くことが、貴重な学習の機会になることを調査者は自覚すべきだという (Pink et al. 2017)。

「感覚的な環境」を構成しているモノには、プラマー (1991) が次のように説明する「生活記録 (documents of life)」も含まれる。

「私たちの世界には、個人的記録が満ちあふれている。人びとは日記をつけ、手紙を書き、写真を撮り、メモを記し、伝記を物語り、落書きをし、自叙伝を出版し、新聞に投書し、遺書を残し、墓石に数々の銘を刻み、映画を撮影し、絵を描き、音楽をつくり、個人的な夢を書きとめようとする」(プラマー 1991: 21)

プラマーは、生活史研究では何よりも「人が現実に通った経験が果たす役割に関心を持つこと、人びとが自らの生活や自らを取り巻く世界を解釈する仕方に関心を持つこと」が重要だと考えた。そのために「具体的な生活をめぐる底深く、直接的な理解」に役立つ、人びとの生活記録を集めるべきだと主張した。現在では、デジタル技術を基盤とした生活記録が多様化している。その最たるものが、スマートフォンをはじめとするモバイルメディアに、私たちが意識的に蓄積している、あるいは無意識的に蓄積されているデータである。

オーストラリア、中国、日本の3カ国で行なわれ、Pinkがオーストラリアで、私が日本で調査を担当した共同研究プロジェクト「Locating the Mobile」(詳細は Hjorth et al. 2020) では、そのようなモバイルメディアの中の生活記録が、インタビューにおいて協力者が生活を振り返り語る上で重要な役割を果たした。その生活記録とは、協力者が自身のモバイルメディアで撮影した写真や動画、通話やメッセージの履歴、様々なアプリケーションの利用履歴などである。

「ホーム」はどのようにつくられるのか

・ビデオ・ツアー

「ビデオ・ツアー (video tour)」(Pink 2013) は、ホームを構成する要素を、調査者と調査協力者が一緒に探索する方法として提案されている。調査者にとっては見慣れない、調査協力者の生活する「感覚的な環境」であるホームに配置された様々なモノが、どのような意味を持つのかを理解することは難しい。一方で、調査協力者にとって自らが埋め込まれた、無意識的に使いこなしている生活の場所について、あらためて説明することも容易ではない。ビデオ・ツアーでは、調査者がホームを構成する様々なモノにビデオカメラを向ける。それに応じて調査協力者は、自らにとってあたりまえで見慣れたモノを新鮮な目で見直し、その意味を検討して語る。この一連のプロセスには、以下の効果があると考えられる (Pink et al. 2017)。調査協力者にとっては、自分のホームでかつて起こったこと、これから起こりうること、そして「通常」がどうであるかについて話したり、「証拠」を見せたりする機会になる。調査者にとっては、ホームを物質的・感覚的な調査対象としてとらえ、その特定の環境での生活がどのようなものであるかを学ぶ機会になる。

・ビデオ再演

「ビデオ再演 (video re-enactment)」(Pink et al. 2017) では、調査協力者が日常生活でしている行為を振り返って、調査者のカメラの前で演じる様子を録画する。調査協力者は日常的に暗黙的に行なっていることを、意識的に再演しながら、調査者とともに自身の生活のありようを探索する。本来であれば、調査者には調査協力者の日常生活の様子は「見えない」ものであるが、この再演の撮影における協働によって、徐々に「見える」ものになっていく。Pink らは、この方法では、ホームについて知る上で次の二つのことが重要であると説明する (Pink et al. 2017)。一つ目は、この方法においては、ある特定の活動や環境について、調査協力者が口頭で容易に表現できる点である。実際の環境に身を置き、調査者とともにその環境を調べ、そこで行なったことを振り返ると、フォーマルな会議室でのインタビューとは異なり、思い出すことも説明することも容易になる。二つ目は、これは身体的・感覚的な意味での「知る」方法であるということだ。言葉だけでは扱うことが困難なことを、ビデオ再演の中では表現・記録することができる。

2.2 「時間性」という概念的枠組み

生活の場所としてのホームを理解するために、Pink らは、「時間性 (temporalities)」「環境 (environments)」「活動と動き (activity and movement)」という三つの概念を提示している (Pink et al. 2017)。本稿ではその全てについて議論することはできないので、一つ目の「時間性」に注目し、その具体例として挙げられている「プロジェクトとしてのホーム」と、「時間にもとづくテクノロジーの利用」を取り上げる。まず、その二つについての

説明を以下に要約する (Pink et al. 2017: 27-38 から訳出)。

・プロジェクトとしてのホーム

プロジェクトとしてのホームとは、ホームを、多くの物質的、感覚的な方法で継続的につくられたり、作りかえられたりしている「進行中のプロジェクト」として見るという考え方である。Pink は、イギリスとスペインでの研究に参加し調査対象となった人びとが、ホームを「不完全」あるいは「未完成」と見なしていたことをふまえ、次のように主張している。「永遠に不完全なプロジェクトであるホームは、物質的に完全に実現されることはなく、その代わりに、絶えず発展する一連の夢や計画として、人の想像力の中に部分的に存在する」(Pink 2004)。ホームが、プロジェクト的に時間の経過によって変化するという考えが顕著になるのは、家族が増えるときや、歳をとって家の中の配置を変える必要があるときなどである。こうした傾向は文化や国の文脈によって異なるものの、複数の国での研究プロジェクトで共通して、人びとがホームを経験する方法の一部として「未来」が一貫して現れていた。つまり、研究者に提示されるホームとは、常に「なりつつあるもの」ということになる。それは言葉だけで表現されるものではなく、より身体的な方法で感じられたり想像されたりするものだと考える必要がある。

・時間にもとづくテクノロジーの利用

様々な家電機器に搭載されている時計やタイマーをはじめとする、時間にもとづくテクノロジーが、日常生活の構造を秩序立てて組織化する方法と関連して利用されている。その際、そうしたテクノロジーは、日常生活のある活動を半自動化する役割を果たしているだけでなく、人びとにとっての「ホーム」の雰囲気や特定の感覚を作り出すプロセスの一部にもなっていることが研究により明らかになった。たとえば、夜に寝室でメディア機器をタイマーとともに利用することで、就寝前にテレビやラジオや音楽などをつけて心地よい雰囲気をつくり出し、就寝後には自動的に消えるようにするといったことである (Pink and Leder Mackley 2012)。Pink らが4年間かけて実施した共同プロジェクト「Low Effort Energy Demand Reduction」(LEEDR) の研究の10代の参加者は、毎朝シャワーの時間を計るために、携帯電話で同じ曲を再生していた。それは彼のお気に入りの曲で、約3分間続くことを知っていたので、シャワーの時間を「確認」するのに役立っていた。部屋で髪を乾かし、服を着ている間も音楽を流し続け、1階に降りると家族のタブレット端末を使って、朝食を食べながら YouTube を見るのが彼の習慣だった。このように、時間にもとづくテクノロジーを利用してはかれるタイミングに目を向けることは、人びとにとってのホームの時間性、日常生活における意図、毎日の活動を導く優先順位を理解し説明する一つの方法になる。

「ホーム」はどのようにつくられるのか

3. ビジュアル・エスノグラフィー研究の事例

3.1 調査概要

ここで取り上げるのは、私が博士研究で制作した映像作品『移動する「家族」』（大橋 2018a）のために 2015 年から 2017 年にかけて実施した調査の事例である。本作は、前出の Pink によるビジュアル・エスノグラフィーの方法論をベースにして、日本で「トランスナショナルな生活世界」（小内 2007）を生きる 5 名の調査協力者と協働して制作したものである。自分や家族の移動／移住の結果、異なる国で暮らしながら、国境をまたがる様々な交流によって家族関係を形成、維持している人びとが、どのような経験をしているかをとらえるために、「トランスナショナルな生活世界」という概念的枠組みを用いた。5 名の調査協力者それぞれと、1 年間かけて協働して「トランスナショナルな生活世界」のありようを調査研究し、映像作品と博士論文にまとめた。その際は、「家族」に焦点をあてており、「ホーム」については考察しなかった。本稿では、2 名の調査協力者の事例を、「ホーム」を理解するための概念的枠組み「時間性」の具体例である「プロジェクトとしてのホーム」と、「時間にもとづくテクノロジーの利用」を手がかりにとらえ直してみたい。

3.2 調査協力者

調査協力者のプロフィールを以下に示す。なお、調査者である私と調査協力者との関係性をわかりやすくするために、私が実際に彼らとのコミュニケーションで使っている呼称を用いて記述する。

・しゅうへいくん（20 代）

しゅうへいくんとは、私の博士研究の副査であった水野大二郎慶應義塾大学准教授（当時）の紹介で出会った。私の博士研究に対して貴重な事例を提供してくれるだろうというのが、紹介の理由だった。しゅうへいくんは、大学を卒業してからフリーランスの Web コーダーとして、プロジェクト単位で仕事をしていた。8 歳の時から同じ家に住んでいる。両親が中学 1 年の頃に離婚し、父親は家を出た。その後、母親は日本語教師として働くために、単身でベトナムに移住した。母親が移住した後の 10 代後半から、兄と一緒に暮らしていたが、兄は数年前に結婚して家を出た。それ以来、しゅうへいくんは愛犬のカイちゃんと暮らしていた。

・ビバスさん（30 代）

ビバスさんとは、ビサルさんという知人の紹介で出会った。ビサルさんとは、神奈川

県横浜市内の団地で調査をしていた際に出会った。ビサルさんはネパール出身で、当時、団地の中の商店街でインド・ネパール料理店を経営しながら、店の2階で暮らしていた。その後、ビサルさんは店を閉めてアメリカに引っ越したが、私が博士研究で調査協力者を探していることをFacebookのMessengerで伝えたところ、妹の夫であるビバスさんを紹介してくれた。ビバスさんは、15年ほど前、20歳を過ぎてすぐの頃にネパールから日本に移住した。日本語学校と旅行の専門学校で勉強し、いくつかのアルバイトや仕事を経験した後、自分で定食屋を始めた。小学生の頃に、JICA（独立行政法人国際協力機構）からネパールに派遣されて来た日本人が、学校にトイレを作ってくれたのを見て、日本人は礼儀正しくて技術を持っていると感銘を受けたことが、日本に移住しようと思ったきっかけだ。調査当時、ビバスさんは妻と娘と3人暮らしで、ネパールに両親、兄、姉、妹とその家族、そして多くの親戚がいた。弟はアメリカに住んでいた。

3.3 プロジェクトとしてのホーム：しゅうへいくんの事例

調査当時、しゅうへいくんは、愛犬のカイちゃんの介護に追われ、自宅をあまり出ることなく生活していた。カイちゃんは老犬で衰弱しており、調査期間の終盤で亡くなった。しゅうへいくんがカイちゃんを看取るまでの1年間、私はしゅうへいくんの自宅を度々訪問した。しゅうへいくんと協働してビデオツアーやビデオ再演による調査を実施し、しゅうへいくんの生活に対する理解を深めた。



画像1 カイちゃんの介護をするしゅうへいくん
(2017年3月のビデオツアー中に大橋香奈が撮影した動画のスクリーンショット)

しゅうへいくんは、カイちゃんの介護を中心とした生活で、同世代の友人たちのように

「ホーム」はどのようにつくられるのか

働くことができず、兄や海外で働く母からの経済的支援を受けていた。しゅうへいくんが働くことを妨げているカイちゃんの介護とは、実際にはどのような身体的・感覚的行為なのか。私がビデオカメラを向け、しゅうへいくんが自身の書斎を紹介する「ビデオツアー」の調査を行なっている最中に、書斎の隅で寝ていたカイちゃんが水を飲もうとしたので、しゅうへいくんが支える場面があった（画像1）。自分では水を飲むこともままならないカイちゃんを、しゅうへいくんが持ち上げ、カイちゃんが飲みやすいように高さを調整してある容器まで運んだ。書斎には、この水の容器だけでなく、トイレシート、毛布、汚れた床を掃除するためのスプレーや雑巾など、カイちゃんに必要なモノが、しゅうへいくんの考えにもとづいて配置されていた。こうした物質的・感覚的な環境としてのホームのありようは、「ビデオツアー」をしたからこそ見えてきたことである。

また、しゅうへいくんは、普段自宅で行なっている家事を「ビデオ再演」の過程で見せながら、次のように語った。

一番辛いのは、睡眠不足からくる苛立ち。カイちゃんを介護しながら、早く死んでしまえばいいのと思ってしまう自分と、それに対してなんてことを考えているんだと思う自分。その葛藤。実際に介護をしていて、カイちゃんの体を触った時、その細さを直に感じた時に、死を感じて、悲しくなり、罪悪感を感じて辛くなる。今24歳で、同じ世代の友人たちは働き盛りで社会に必要とされている。それに対して、自分は社会に出ることができない。社会に認められないことへの焦燥感がわいてくる。このカイちゃんの介護生活をしていると、生産的な作業ができない。社会から隔絶されていることの辛さ。人間の介護については、社会はある程度認めるけど、ペットの介護をしていることについて、社会は認めてくれないし、サポートする制度もない。病院に預ければいいという人がいるけれど、そうなる、月々何十万円もかかる。それは実質的に無理。その分と自分の生活費を稼ぐことなんて実質的には不可能。この状況を、この家で今一人で引き受けている。人に話す時も、笑いながらでないと辛い。自分の立ち位置への焦りと、カイちゃんの死への葛藤で辛い。金銭的には、母に頼っている自分がいやだ。でも誰かが引き受けないといけない。留守にするので一時的にカイちゃんを友達に任せた時に、友達が辛そうにしていたのを見て、自分が辛いことをしていたとやっと気づいた。客観的にそのことを認められて、少し楽になった。

最近、その中で何をすればいいかを考えた結果、家の手入れに力をいれるようになった。それは、母や兄に対する奉仕になる。人から見れば閉じた社会かもしれないけど、母や兄が自分にとっての「社会」なので、そこで必要とされているという感覚を得られることが大事だと感じる。ここ最近で気づいたストレス解消法。そうでもないとうつになってしまふ。今後はさらに、このことをブログに書いてみようかなと思う。非公開でも、書くことで見ることで客観的に自分がやっていることがわかることで、「あの作業は辛かった。

でもやった自分がある」と感じられるので、ストレスの解消になるんじゃないかなと思う。

家でやっている手入れや、畑のことを書いてみようかなと。古民家で暮らすとはどういうことか。常に手入れが必要。家も庭も。やることは腐る程ある。この仙人のような生活を、人はなかなか送れないだろうと。長期間、誰かの「死」に直面しつづける生活を、同世代はあまり体験していないだろうと思う。修行僧のような生活。この先、どこでも生きられるという感覚はある。(2017年3月のしゅうへいくんのビデオ再演中のインタビューより)



画像2 自宅の庭を手入れする様子を再演するしゅうへいくん
(2017年3月のビデオ再演中に大橋香奈が撮影した動画のスクリーンショット)

この語りは、「ビデオ再演」のプロセスで、しゅうへいくんが石垣を整えたり、枯れ木を片付けたりするなどの自宅を手入れする作業を私に見せることで、いつも作業している時の感情が喚起されて出てきたものである。その語りをあらためて読んでみると、ホームの整備に取り組むというプロジェクトをつくりだすことで、当時のしゅうへいくんは、カイちゃんの介護における苦痛・ストレスの解消や、経済的に支援してくれている兄や海外で働く母への奉仕につながることを期待していたとわかる。しゅうへいくんは生活の場所としてのホームを、「不完全」あるいは「未完成」の「プロジェクト」ととらえることで、自分の役割を見出し、彼の直面している困難さを緩和しようとしていたと言えるだろう。

3.4 時間にもとづくテクノロジーの利用：ビバスさんの事例

ネパール出身のビバスさんは、離れて暮らす家族と、スマートフォンを使って日々連絡をとりあう。Skype、Viber、FacebookのMessengerを使うことが多いが、ネパールで停電が起きて相手がインターネットを使えない時は、固定電話で連絡する。私は、ビバスさんに

「ホーム」はどのようにつくられるのか

その話を聞き、いつ、どのようなタイミングで、ネパールやアメリカに住む家族と交流しているのかを知りたいと思い、ビバスさんにマンスリーカレンダーを渡して、交流の記録してもらった上で、インタビューをしようと考えた。ところが、そのカレンダーは全く役に立たなかった。カレンダーを見たビバスさんは開口一番、笑顔で「今日はネパールでは、2072年12月20日です」と言った。ネパールでは、西暦ではなくビクラム暦と呼ばれる暦が使われていて、人びとの生活はビクラム暦のカレンダーをベースに営まれている。ビバスさんは、日本での日々の商売や生活には、西暦のカレンダーを使う。しかし、それだけではネパールの家族とのつながりを維持するには不十分である。ネパールの祭りやお祝いの日に、海の向こうで暮らす家族に連絡をとるには、ビクラム暦のカレンダーを確認しなければならない。ビバスさんのスマートフォンには、「ネパールカレンダー」というアプリケーションが入っている。このカレンダーを毎朝必ず確認する。日時を入力すると、西暦からビクラム暦、ビクラム暦から西暦に変換できる。ビバスさんは、このように西暦とビクラム暦の二つのカレンダーを行き来しながら暮らしていることがわかった。

私の当初の調査計画では、日本のマンスリーカレンダーをビバスさんに渡して、新たに「生活記録」を作成してもらうことを考えていたが、それはビバスさんの生活の実態に即したアプローチではなかったため、全く役に立たなかった。「具体的な生活をめぐる底深く、直接的な理解」に役立つ「生活記録」は、調査者が調査協力者とともに生活の実態を探索することで、徐々に見えてくるものなのだろう。



画像3 ネパールカレンダーのアプリ
(2016年4月に大橋香奈が撮影)

ビバスさんの調査では、1年間の調査期間中にネパールの人びとにとって1年で最も大きな祭りである「ダサイン」の日に居合わせることができた。ビバスさんと何度か話をするうちに、この祭りが家族の関係にとって重要であることがわかった。ダサインは家族で祝うイベントである。ビバスさんによれば、ネパールに住んでいたらこの時期には2週間程度仕事を休んで、家族で集まってみんなで祝う。各家庭でヤギを一頭解体して食べる習慣がある。ヤギの解体は男性の仕事で、女性は特別な料理をたくさん用意する。米粉でつくるドーナツ「セルロティ」もその一つだ。家族でそろって、目上の人から、「ティカ」という赤い色素を混ぜた米をひたいにつけてもらう。これは家族の健康や幸せを祈って行なう儀式だ。ネパールに住んでいたら、男性はスーツ、女性はサリーを着て、自分の家だけではなく、妻の実家にも行くが、ビバスさんは日本にいたので、自宅日本で住んでいる家族と集まって祝う。

ビバスさんは、都内で2DKの都営住宅に妻サラダさんと娘のソエタちゃんと住んでいる。私が立ち会ったダサインの日には、同じく日本に住んでいるサラダさんの弟夫妻を自宅に招き、男性陣はおろしたての服を、女性陣はサリーを着て、サラダさんがつくった料理を食べ祝った。ティカの儀式の際には、日本で購入したアイロン台に布をかけて器や飾りを設置し、YouTubeで見つけたネパールの音楽を流していた。また、儀式の最中には、ネパールにいる家族とビデオ通話して、ダサインを祝う様子を伝え合っていた。



画像4 ビバスさん一家がダサインを自宅で祝う様子
(2016年10月に大橋香奈が撮影した動画のスクリーンショット)

このようにビバスさんの場合、「時間にもとづくテクノロジー」であるネパールカレンダーというアプリケーションを使って、ネパールにいる家族やネパールの伝統的な暮らしの時間と「同期」することで、日本にいながらネパールを感じられるホームをつくりあげていた

「ホーム」はどのようにつくられるのか

と見ることができる。

4 結語

本稿では、生活の場所としてのホームが、どのようにつくられているのかを考えてきた。この問いに取り組むために、『Making Homes: Ethnography and Design』(Pink et al. 2017)で提示されているホームを理解するためのアプローチとして、ビジュアル・エスノグラフィーの方法論にもとづいた、モバイルメディアを利用したインタビュー、ビデオ・ツアー、ビデオ再演の三つの方法を取り上げた。また、概念的枠組みの「時間性」とその具体例である、「プロジェクトとしてのホーム」と「時間にもとづくテクノロジー」に注目した。

3章では私が過去にビジュアル・エスノグラフィーの方法を用いて実施した博士研究における調査の事例を、「プロジェクトとしてのホーム」と「時間にもとづくテクノロジー」を使ってとらえ直してみた。

しゅうへいくんの事例では、カイちゃんの介護を中心としたしゅうへいくんの生活が営まれていた物質的・感覚的な環境としてのホームのありようが、「ビデオツアー」を通して明らかになった。また、「ビデオ再演」のプロセスでの語りから、彼が生活の場所としてのホームを、「不完全」あるいは「未完成」の「プロジェクト」ととらえることで、自分の役割をつくり、直面している困難さを緩和しようとしていたことを理解できた。

ビバスさんの事例からは、調査者が調査協力者とともに生活の実態を探索する中で、「具体的な生活をめぐる底深く、直接的な理解」に役立つ「生活記録」を見出すことが重要であるとわかった。また、ネパールカレンダーのアプリケーションのような「時間にもとづくテクノロジー」を使って、母国や異国の家族の暮らしと「同期」することが、「トランスナショナルな生活世界」を生きる人びとにとって、ホームをつくる方法になっていることが見えてきた。

本稿では、『Making Homes: Ethnography and Design』(Pink et al. 2017)で提示されているホームを理解するためのアプローチを使って、過去の調査事例を再検討することに留まっている。今後の研究においては新たな調査研究をデザインして実施し、ホームを理解するためのアプローチの考察を深めたい。

付記

本稿で取り上げている調査事例の内容の一部は、私の未公開の博士論文(大橋 2018b)とウェブマガジンの記事(大橋 2018c)にも記載しているが、本稿全体はその時点とは異なる視点で新たに書き下ろしたものである。

謝辞

2022年10月29日に開催された日本建築学会近畿支部住宅部会主催のセミナー（共催・企画：京都大学柳沢究研究室，京都大学前田昌弘研究室）—『移動する「家族」の住まい—にて講師を務めることをきっかけに，本稿を執筆した。セミナーの企画準備をメインで担当された柳沢研究室修士の野田倫生さんから，「移動」と「住まい」の関係や，これからの住まいの在り方に関して挙げていただいた論点が，本稿に反映されている。野田さんおよび本セミナーの関係者の皆様に深謝する。また，本稿で取り上げた調査事例のしゅうへいくん、ビバスさんとその家族をはじめとする調査協力者に，あらためて感謝申し上げる。

引用・参考文献

- バンクス，M. 石黒広昭監訳（2016）『質的研究におけるビジュアルデータの使用』新曜社。
- ブルーダー，J. 鈴木素子訳（2018）『ノマド：漂流する高齢労働者たち』春秋社。
- Encyclopædia Britannica, Inc. (2022) 'What's the difference between a house and a home?' <https://www.britannica.com/dictionary/eb/qa/what-s-the-difference-between-a-house-and-a-home> (2022年10月20日アクセス)
- 福田珠己（2008）「『ホーム』の地理学をめぐる最近の展開とその可能性—文化地理学の視点から—」『人文地理』60（5），pp.403-422.
- Hjorth, L., K. Ohashi, J. Sinanan, H. Horst, S. Pink, F. Kato, & B. Zhou, (2020) *Digital Media Practices in Households: Kinship through Data*, Amsterdam: Amsterdam University Press.
- 国立社会保障・人口問題研究所（2016）「第8回人口移動調査」<http://www.ipss.go.jp/ps-idou/j/migration/m08/ido8gaiyou.pdf>（2022年10月20日アクセス）
- Low, S. (2017) *Spatializing Culture: The Ethnography of Space and Place*, Routledge.
- 大橋香奈（2018a）『移動する「家族」』[映像作品]
- 大橋香奈（2018b）「『移動する「家族」』の映像エスノグラフィー実践：リサーチ・オン・ザ・ムーブ」慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科政策・メディア専攻 第4945号，2018年（博士学位論文）（未公開）
- 大橋香奈（2018c）「離れて暮らす「家族」をつなぐカレンダー」<https://bionet.jp/2018/04/02/families-calendar/>（2022年10月20日アクセス）
- 大橋香奈（2019）「映像エスノグラフィー研究における作品の行く末：『移動する「家族」』の上映実践を事例に」『生活学論叢』35, pp.1-14.
- 小内透（2007）「トランスナショナルな生活世界と新たな視点」『調査と社会理論・研究報告書』24, pp.1-11.
- Pink, S. (2004) *Home truth: Gender, domestic objects and everyday life*, Oxford: Berg.
- Pink, S. & Leder Mackley, K. (2012) "Video and a sense of the invisible: approaching domestic energy consumption through the sensory home", *Sociological Research Online*, 17 (1), pp.87-105.
- Pink, S. (2013) *Doing Visual Ethnography*, Sage.
- Pink, S., Leder Mackley, K., Morosanu, R., Mitchell, V., & Bhamra, T. (2017) *Making Homes: Eth-*

「ホーム」はどのようにつくられるのか

nography and Design, Bloomsbury Academic.

プラマー, K. 原田勝弘, 川合隆男, 下田平裕身監訳 (1991) 『生活記録 (ライフドキュメント) の社会学—方法としての生活史研究案内』 光生館.

小学館 (2022a) 「ハウスの意味・解説」 <https://www.weblio.jp/content/%E3%83%8F%E3%82%A6%E3%82%B9> (2022年10月20日アクセス)

小学館 (2022b) 「ホームの意味・解説」 <https://www.weblio.jp/content/%E3%83%9B%E3%83%BC%E3%83%A0> (2022年10月20日アクセス)

総務省統計局 (2019) 「平成 30 年住宅・土地統計調査 住宅及び世帯に関する基本集計結果の概要」 https://www.stat.go.jp/data/jyutaku/2018/pdf/kihon_gaiyou.pdf (2022年10月20日アクセス)

ジャオ, C. (2020) 『ノマドランド』 [ブルーレイ] ウォルト・ディズニー・ジャパン.